しあわせ

1　月　号

清風宝樹をふくときは
いつつの音声いだしつつ
宮商和して自然なり
清浄勲を礼すべし

（『浄土和讃』四一）

浄土では、清らかな風が宝樹をふくとき、五つの音色が奏でられ、それらが自然に調和している。浄土からかおる清らかな音声を、礼拝いたしましょう。（意訳）

「手を合わす母」

謹賀新年

新型コロナウイルスに翻弄された昨年から、逆転の一年の始まりである。

諸行は無常。猛威をふるった新型コロナもワクチン開発で脅威でなくなる日が近くなった。なんとしても平和の祭典、東京オリンピック開催は実現してほしい。

次々と新しい課題が現れ、翻弄されながらしかこの世の中は動いてゆかない。これを諸行無常・諸法無我という。常に変化し動いてゆき確かなものはないということはまた、知恵と力でどんなことも乗り越えられるということでもある。

だからこそ、人は前を向いて生きて往ける。光を見出すことができる。光に向って歩みを進められる。新年を迎え、夢を描き夢に向かって立ち向かう若者の姿に、阿弥陀様はエールを贈ってくださっている。オリンピックに栄え有れと。

法座案内

年末・年始のご法要

除夜会（大晦日午後十一時半～）

元旦会（元旦午前七時半～）

御正忌報恩講法要

一月十四日（金）昼席・夜席

十五日（土）昼席

ご法話武田一真（自坊住職）

法味の会　一月はお休みです

※本堂内は二四時間換気をしておりますが、お参りの際はマスク着用をお願い致します。

府中町山田一丁目二十五十三
栢原山　龍仙寺
電話（〇八二）二八二一四八二三

【『浄土和讃』四一】～清らかに薫る風～

浄土では、清らかな風が宝の樹々のあいだを吹きわたるとき、五つの音色が奏でられ、それらの音が、おのずから美しく調和している…、そのようにお経には説かれています。五つの音声とは、宮（きゅう）商（しょう）角（かく）徵（ち）羽（う）という、雅楽でいう五つの音階のことであり、お経ではとくに宮（きゅう）・商（しょう）の二つの音をあげて、それらが自然に調和していると説かれています。親鸞さまもお経文にそって和讃されており、

宮商和して自然なり

と、「宮・商」という二音を出されています。じつはこの二音は、洋楽でいう「ド」と「レ」にあたり、不協和音となる音です。「ド」と「ソ」ならきれいな和音となりますが、「ド」と「レ」では音がぶつかってしまうのです。この娑婆ではぶつかりあう音も自然に調和する世界、それが阿弥陀さまの浄土なのですね。

池の水にふたつの石を投げ入れると、それぞれの波紋がひろがり、かならずぶつかります。おなじように、わたしたちは誰しも、自分を中心に、それぞれの心の世界を描いています。心の中心は十人いれば十人みんな違いますので、私たちはかならずぶつかります。集合写真をいただいときも、まっさきに自分の顔に目がいきますね。そのように、心の根っこから、無意識に自分を中心としていながら、自分は正しいと思いこんでいる。だから人はいつの世も、ぶつかりあうのでしょう。

そういえばきのうの食卓で、幼稚園に通っている娘がこんな話をしていました。

「右と左がね、ようわからん子がおるんよ。あのね、なっちゃんからみたら、こっちが右で、こっちが左でしょ？ でもお母さんからみたら、こっちが右で、こっちが左でしょ？ それがね、ようわからん子がおるんよ。」

自分もまさに同じなのでは…と思いました。

自分が楽しいと感じていても、相手は悲しいのかもしれません。自分には理解できなくても、相手には相手の立場があるでしょう。自分が見ているのは、あくまでも自分のまなざしであり、相手には相手の立場があり、自分には見えていない他者の心がそこにある。

「それがね、ようわからん子がおるんよ」

娘のことばがそう聞こえました。自分中心の世界を描きだし、ぶつかりあって生きる私たち。この私たちが、おのずからうちとけあい、調和していく世界、それが浄土なのですね。

清浄勲（しょうじょうくん）を礼すべし

その風に吹かれると、相容れないはずの音も、おのずから美しい和音となっていく。浄土の清らかなその風は、彼岸の浄土だけではなく、この娑婆にも薫ってくださることを、親鸞さまは「清浄勲（しょうじょうくん）」と讃えられました。

お香のかおりが周囲にゆきわたり、人々の身に薫じついていくように、浄土の風はお念仏の声となって届いており、清らかな匂いにこの身を染めてくださると言われるのです。

「お念仏いただくと、ほんのすこし隙間ができるんですなあ。そこからまっさらな風が、お浄土からすーっと入ってくるんですなあ。」

と梯実圓和上は仰っていました。どうしても理解できない、そんな人に遇うことも娑婆ではあるでしょう。けれどお念仏のなかに如来のまなざしを仰ぐならば、ほんの少し隙間ができるのです。自分には絶対にゆるせないけれど、阿弥陀さまにとっては、あなたもかけがえのない仏の子なのですね、わたしもあなたも共に凡夫なのですね…。そうお念仏のなかに思いとらせていただくとき、わたしの世界にわずかな隙間があき、まっさらな風が入ってくださいます。ともにお念仏いただきましょう。お浄土の風をいただかなければ、どうしてこの世を受けとめられるでしょうか。